

平成23年
7月5日

病害虫発生予報 7月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

農薬散布時には周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょう。
事前に近隣圃場の農家に一声かけましょう。

—平成23年度茨城県農薬危害防止運動期間中です(6/15~9/14)—

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水稲：いもち病(葉いもち)	1
水稲：斑点米カメムシ類，イネツトムシ，ニカメイガ	2
ナシ：黒星病	4
ナシ：ナシヒメシクイ	5
ブドウ：べと病	6
果樹共通：カメムシ類	6

【その他の病害虫】	7
水稲，サツマイモ，ナシ，ブドウ，夏ネギ，夏秋ナス	

II. 今月の気象予報

最新の農薬登録内容は，(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

水田において農薬を使用するときは，農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに，止水期間を1週間程度とすること。

詳しくは，病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel:029-227-2445

予報内容は，ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. いもち病（葉いもち）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、葉いもちの発病度¹⁾は0.2（平年値0.3）と平年並である。
- ② 6月下旬現在、調査圃場周辺における葉いもちの発生は、平年よりやや少ない。
- ③ 6月におけるいもち病の感染好適日（BLASTAM²⁾による）の出現日数は、平年並である。
- ④ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いと予想され、発生を助長する条件ではない。

1) 発病度：病斑をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

2) BLASTAM：アメダスデータを利用した葉いもちの発生予測プログラム

[防除上注意すべき事項]

- ① 稲の葉色が濃い水田、置苗及びその周囲、水口などを観察し、初発の確認に努める。例年、梅雨明けまでは、発生が増加するため、現在発生がみられない水田でも、今後とも注意する。
- ② 発生がみられる水田では、防除を実施する。なお、粒剤で防除する際は、必ず湛水状態で薬剤を散布し、薬剤の効果や環境への配慮から1週間は止水して、湛水状態を保つ。その後、生育に応じた適正な水管理にもどす。
- ③ 置苗は、いもち病の発生源となるため、現在水田に置苗がある場合には、持ち出して土中に埋める等の処分をする。

防除所レポート [BLASTAMによる葉いもちの感染好適日の状況について]

- ① 6月中の県内アメダス地点14か所におけるいもち病感染好適日^{*}（BLASTAMによる）のいもち病感染好適日^{*}（BLASTAMによる）の出現日数の合計は、22（平年値22）と過去11年中4位である。また6月下旬（6/21～6/30）での出現日数の合計は、16（平年値13.5）と過去11年中5位である（表）。
- ② 葉いもちの発病の増加は、感染好適条件が出現した日から7～10日後と考えられる。曇雨天が続く等、発病の好適条件が見られる場合はいもち病の発生に注意する。

^{*}感染好適日：当日の葉面湿潤時間が一定以上、前5日間の平均気温が20～25℃。

表 6/21～6/30におけるいもち病感染好適日の出現状況

	6/21	6/22	6/23	6/24	6/25	6/26	6/27	6/28	6/29	6/30	感染好適日数	
											H23	平年値
北茨城	—	—	—	—	—	—	●	●	—	—	2	0.9
大子	—	●	—	—	—	—	●	—	—	—	2	1.7
常陸大宮	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	1.8
日立	—	—	—	—	—	—	●	●	—	—	2	1.8
笠間	—	●	—	—	—	—	●	●	—	●	4	1.3
水戸	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	1	1.0
古河	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0.4
下館	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—	1	0.6
下妻	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	1	0.7
銚田	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0.8
つくば	—	●	—	—	—	—	—	—	—	●	2	0.7
土浦	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1.0
鹿嶋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0.3
龍ヶ崎	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0.5

●：感染好適日 ?：判断不能

合計	16	13.5
----	----	------

(水稻 続き)

2. 斑点米カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並～やや早い	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、水田付近のイネ科雑草における斑点米カメムシ類の発生量は平年よりやや多い。主な発生種は、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシである。なお、本県の主要種であるクモヘリカメムシについても発生を確認している。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 農道や畦畔等のイネ科雑草は、斑点米カメムシ類の生息場所となるため、除草を徹底する。ただし、出穂期近くになってからの除草は、カメムシ類を水田内へ追い込むことになるので、水稻の出穂2週間前までに終わらせる。
- ② 出穂が周辺よりも早い水田では、成虫の飛来が集中しやすいので、発生には十分注意する。
- ③ 出穂期～穂揃期に斑点米カメムシ類を認めた場合は、防除を実施する。

3. イネツトムシ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並～やや早い	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、発生地点率は平年よりやや高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 葉色が濃い水田に集中して産卵するため、震災の影響により田植えが遅れた水田や飼料用稲では、特に発生に注意する。
- ② 被害が大きくなる第二世代幼虫の発生は7月下旬からと考えられるので、7月末～8月初めに水田を観察し、幼虫が小さいうち（葉先が巻かれ始めた時期）に防除を行う。

4. ニカメイガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、フェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺数は、水戸市及び筑西市では平年より多く、龍ヶ崎市では平年よりやや多い。
- ② 6月下旬現在、第一世代幼虫による心枯れ茎の発生を確認している。

(水稻 ニカメイガ 続き)

[防除上注意すべき事項]

- ① 本虫の発生は、近年、局地的に増加している。第一世代幼虫による被害が多い水田では、第二世代幼虫を対象に薬剤防除を8月上旬～中旬に実施する。

防除所レポート

県内の水田で発生する斑点米カメムシ類の発生量及び発生種について

- ① 8月上旬の水田におけるすくい取り調査では、斑点米カメムシ類の発生量は過去10年間で平成21年が最も多く、次いで平成22年であった。(図1)。
- ② 斑点米カメムシ類全体の発生量に占めるクモヘリカメムシの割合は、40～84%と全ての年で最も高かった(図1)。
- ③ イネカメムシ(写真)は、近年、鹿行地域・県南地域で増加傾向にある。本虫は、過去に本県の主要種であり、昭和50年代以降ほとんど生息が確認されていなかった。平成22年の8月上旬の調査では、すくい取り虫数全体の11%を占めていた(平年4%) (図2)。
- ④ 県内の水田においてその他に発生する主な斑点米カメムシ類は、ホソハリカメムシ、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等である(図2)。

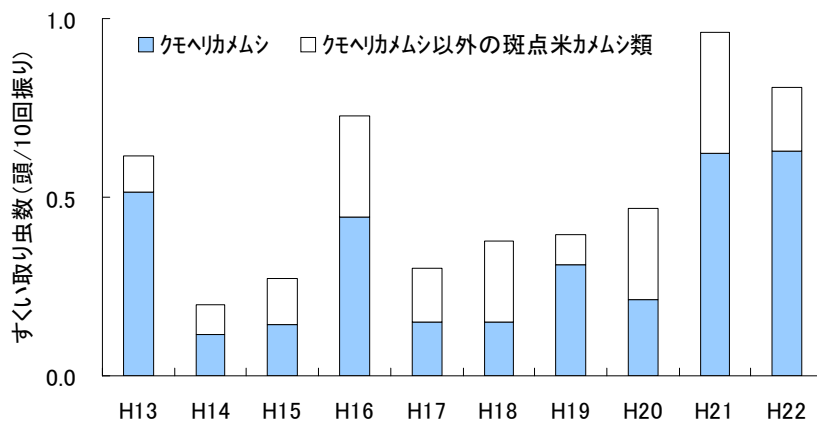


図1 水田におけるクモヘリカメムシ等斑点米カメムシ類の発生量の年次推移 (巡回調査地点における8月上旬のすくい取り調査結果)

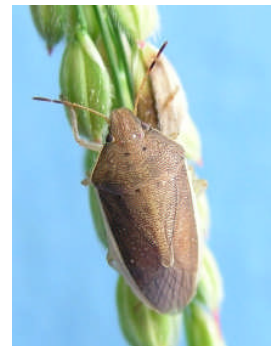
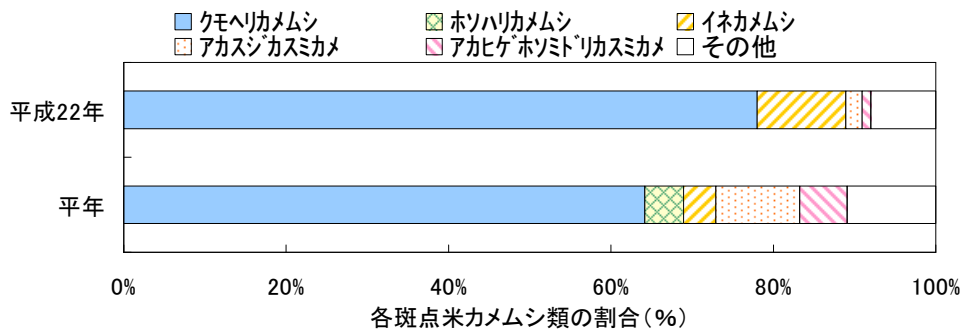


写真 イネカメムシ成虫

図2 水田における斑点米カメムシ類の発生種の割合 (巡回調査地点における8月上旬のすくい取り調査結果)
※平年：平成13～22年の各斑点米カメムシ類のすくい取り虫数の平均値から各斑点米カメムシ類の割合を算出した。

ナ シ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在，発病葉率は平年並，発病果率は平年よりやや高い。
- ② 気象予報によると，向こう1か月の気温は平年より高く，降水量は平年並か少ないと予想され，発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病した葉及び果実は二次伝染源となるため，見つけ次第除去し，土中深く埋めるなど，適切に処分する。
- ② 発病が確認された圃場では，発病部位を除去した後に薬剤防除を行う。
- ③ 薬剤散布は，10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部など，薬液のかかりにくい部分に対しては，手散布等により補正散布を行う。

防除所レポート [ナシ「幸水」の黒星病防除について]

- ① ナシ「幸水」の果実は，黒星病に対して，開花後約 65～85 日後に感受性が高くなる。
- ② 各地域の黒星病の感受性が高まる時期（開花 65～85 日後）は，表を参考にする。
- ③ 散布薬剤は参考防除例を参考にし，散布間隔が 10 日以上空かないよう注意する。

表 ナシ「幸水」の黒星病の感受性が高まる時期（開花65～85日後）の目安

地点	開花日	満開日	開花65日後	～	開花85日後
笠間市	4月25日	4月28日	6月29日	～	7月19日
かすみがうら市（旧霞ヶ浦）	(4月21日) ¹⁾	4月24日	6月25日	～	7月15日
かすみがうら市（旧千代田）	(4月24日)	4月27日	6月28日	～	7月18日
石岡市	(4月24日)	4月27日	6月28日	～	7月18日
筑西市	(4月21日)	4月24日	6月25日	～	7月15日
下妻市	(4月21日)	4月24日	6月25日	～	7月15日
八千代町	(4月22日)	4月25日	6月26日	～	7月16日

1)カッコ内の日付は，満開日からの推測値

(ナシ 続き)

2. ナシヒメシンクイ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在，県予察圃（笠間市）に設置したフェロモントラップへの第一世代成虫の誘殺数は，平年よりも多く，多発生した平成18年よりも多い。
- ② 6月下旬現在，地区予察圃（かすみがうら市）に設置したフェロモントラップへの第一世代成虫の誘殺数は，平年よりやや多い。
- ③ 6月下旬現在，被害果率は平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 被害果を見つけた場合は，土中深く埋めるなど速やかに処分し，次世代成虫（第二世代）の発生を防ぐ。
- ② 薬剤散布は，10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部など，薬液のかかりにくい部分に対しては，手散布等により補正散布を行う。
- ③ 昨年，ナシヒメシンクイによる被害が多発生した園では，必ず防除を実施する。
(平成23年6月24日発表の「病害虫発生予察注意報第2号」参照)

防除所レポート [積算気温によるナシヒメシンクイの防除適期の予測]

- ① ナシヒメシンクイ第三世代幼虫を対象とした防除適期は，**第二世代成虫の誘殺数が最高に達した日の直後**である。
- ② ナシヒメシンクイの発育に有効な気温の積算値から，次世代成虫（第二世代）の誘殺数が最高に達する時期を予測すると，表の結果となる。
- ③ 発生時期の予測は7月5日現在であるので，今後の情報を引き続き参考にする。

表 ナシヒメシンクイ第三世代幼虫を対象とした防除適期

地点	第一世代成虫の誘殺最盛期 ¹⁾	防除適期	第二世代成虫の誘殺最盛日 ²⁾ の直後
笠間市（旧友部）	6月第5半旬	7月22日 ～ 7月26日	
笠間市（旧岩間）	6月第4半旬	7月19日 ～ 7月21日	
小美玉市	6月第4半旬	7月19日 ～ 7月21日	
石岡市	6月第2半旬	7月10日 ～ 7月13日	
かすみがうら市	6月第3半旬	7月14日 ～ 7月17日	
土浦市	6月第3半旬	7月14日 ～ 7月17日	
筑西市	6月第5半旬	7月21日 ～ 7月25日	

1) 各地点に設置したフェロモントラップへのナシヒメシンクイ第一世代成虫の誘殺最盛期

2) ナシヒメシンクイの発育零点を11.1℃とし，第一世代の誘殺最盛期からの有効積算温度が384日度となる日を予測した（7月5日現在）。

ブドウ

1. ベと病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月下旬現在、発病葉率は平年より高い。
- ② 一部の露地栽培圃場では、果房での発病が認められた。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年並か少ないと予想され、発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病した葉や果房は伝染源となるので、見つけ次第早急に除去し、土中深く埋めるなど適切に処分する。
- ② 発病が確認された圃場では、発病部位を除去した後に薬剤防除を行う。
- ③ 一度発生すると短期間のうちに蔓延するので、発生に注意し、発生が少ないうちに防除を徹底する。
- ④ 散布薬剤は参考防除例を参考にし、散布間隔が10日以上空かないよう注意する。
- ⑤ 薬剤散布は、10a当たり250リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部など、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

(平成23年6月29日発表の「病害虫発生予察注意報第3号」参照)

果樹共通

1. カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 6月上旬現在、サクラのたたき落とし調査では、チャバネアオカメムシの発生量は平年並で、クサギカメムシの発生量は平年より多い。
- ② 6月下旬現在、予察灯への果樹カメムシ類の誘殺数は、笠間市で平年並、かすみがうら市で平年より多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 夜温が高いと活動が盛んになり、果樹園へも飛来するので、注意する。果樹園内でカメムシ類を確認した場合には、活動が鈍い早朝に薬剤防除を行う。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	紋枯病	発生量：平年並	稲の生育が軟弱になっていると、被害が大きくなるので注意する。
	稲こうじ病	発生量：－	穂ばらみ期～出穂期にかけて、低温で降雨が続くと発生が多い。常発地では防除を行う。
	縞葉枯病	発生地域：県西地域 発生量：平年並 ～やや多い	県西地域におけるヒメトビウンカ第一世代の保毒虫率は、平年並～やや高い。(結城市結城 0%，筑西市二木成 5.6%，筑西市野殿 6.6%)
サツマイモ	イモキバガ (イモコガ)	発生量：平年並 ～やや多い	6月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	ナカジロシタバ	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。
ナシ	ハダニ類	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。
ブドウ	晩腐病	発生量：平年並	6月下旬現在，平年並の発生である。袋かけ前の防除を徹底する。
夏ネギ	ネギアザミウマ	発生量：やや多い ～多い	6月下旬現在，平年よりやや多い発生である。向こう1か月の気温は平年より高いと予想され，発生を助長する条件である。
	ネギハモグリバエ	発生量：やや多い	6月下旬現在，平年並～やや多い発生である。向こう1か月の気温は平年より高いと予想され，発生を助長する条件である。
夏秋ナス	アザミウマ類 (ミカンキイロアザミウマ)	発生量：やや多い	6月下旬現在，平年並の発生である。向こう1か月の気温は平年より高いと予想され，発生を助長する条件である。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 7月2日から8月1日)

気象庁 (7月1日 発表)

< 向こう 1 か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	30	50
降水量	関東甲信全域	40	40	20
日照時間	関東甲信全域	20	40	40

[概要]

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

< 1 週目の予報 > 7月2日 (土曜日) から 7月8日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 70%

< 2 週目の予報 > 7月9日 (土曜日) から 7月15日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 50%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 7月16日 (土曜日) から 7月29日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率 40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し, 適用作物, 使用方法, 注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には, 周辺作物に飛散 (ドリフト) しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず, 良く洗浄しましょう。